

特259

928

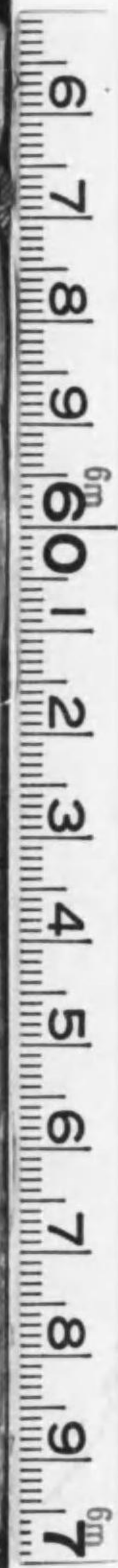
3

猩猩海妻融結

之入戸 上

#

21



始



特25.9
928

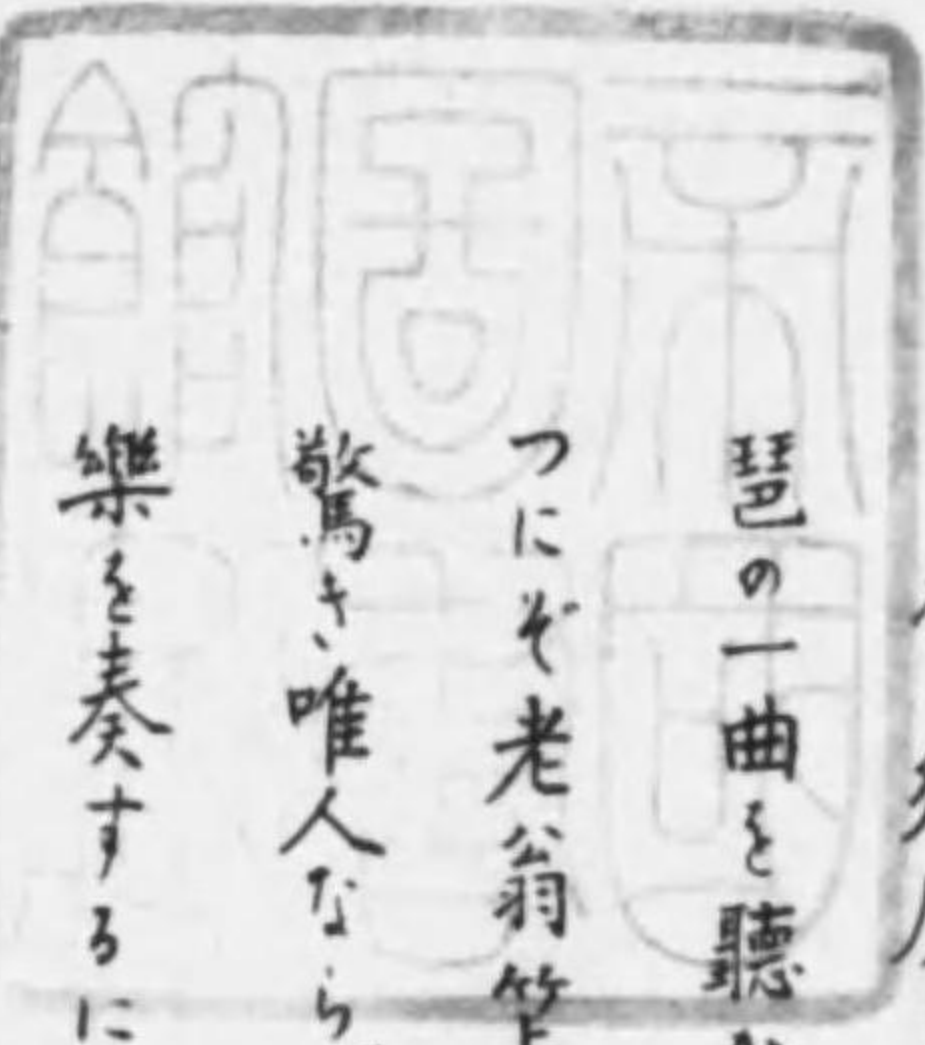
坂戸金剛拾
九代右近氏
但遺稿據二
拾三代右京
氏慧之鈔校

絃 上

梗概 (所) 攝津國須磨

(季) 九月

太政大臣師長は天下無双の琵琶の上手なれば、唐に渡りて更に奥儀を究めんと志し、須磨に到りとある塩の塩屋に一夜を過しぬ。こゝに主の老人夫婦ありて琵琶



の一曲を聽かんと乞ふ。師長乃ち弾じければ折しも村雨降り来りて板屋を打つにぞ老翁管を以て板屋を葺きて雨の音と琵琶の調子を同じくせり。師長驚き、唯人ならず思ひ夫婦に一曲を乞へば、翁は琵琶を姥は琴にて共に遊天



樂を奏するに其技神に入る。師長自ら技の遠く及び難きを恥ぢて入唐の念を断ち密かに都に歸らんとす。夫婦は之を引き留め、真は我等は村上天皇梨壺女御の二人にて汝の入唐をといめん為の斯く現はれたりと告げ、そのまゝ次女を消しけるが、再び天白王の次女にて現はれ給ひ、龍王を呼び獅子丸といふ琵琶を取り寄せ師長に授け給へりとぞ。

絃上 (四五番目)
(略形能三モ)

役別	装束	附
シテ老翁	面三光尉(朝倉尉ニモ) 尉髪 着付無地髪子目 水衣 腰帶 腰蓑	扇 田子
シテツレ 姥	面姥 姥髪 髪帶 着付笄 色無厚板着流 水衣 扇	
シテツレ 藤原師長	黒風折烏帽子 着付厚板 長絹(單袴衣ニモ) 白大口 腰帶 扇 琵琶	
後シテ 村上天皇	面中侍 初冠 色銘卷 着付笄 單袴衣(小盃衣ニモ) 込大口 指貫	
後ツレ 龍神	面黒髪 色銘卷 赤頭 龍 龍臺 着付厚板 注被 半切 腰帶 打杖 琵琶	
ワ キ 師長の從者	着付厚板 法被 白大口 腰帶 太刀 扇(又素袍男ニモ)	
ワ キツレ 同 三人	素袍男(着付無地髪子目) 素袍上下 小刀 扇	

絃上

御三人
ハまの^{シホ}泣^デ跡^ホを^シ流^シの^シた^シて^シな^シる^シらん^シ
 師長と我事也
 天^ナが^タ下^タに^ナ双^フひ^フを^フ記^フ記^フ色^フの上^フま^フにて^フ
 心^{ココロ}入^イる^ルの^ノ心^{ココロ}あ^アる^ルに^ニより^リ先^マズ

名取の月をば祝せん為津の國
須磨に浦ふ下向ハ 師長 我を扱
河の名残を於の空より扱深きに
おろをも 口宛 末に刃をさし山崎も
さしおろよ成で 口宛 浪越す袖も
湊川 口宛 知らぬ方にも我ハ

生田のまろくも月を来れ留にて
心づくれ旅のなされを是に
の道途と思ふも勇を向る大海の林
をおろごり波の浦ふも思にたり
浦よ思にては是を成壇屋のまを

法書
法書

侍てお霜をヤシ付うまらにていせんうう

お座りく つぎ 杖かぬるけくむ桶の

若ききにやすこ力流ふ老の杖 チカラ

ニヨ上 浪濤行や次テの浦 ニ人 月と濡家

杖うさ 送ヨミ 面も浦入日海よ カイ

浮いぬ石の汀塩焼く海士の影ひ アカシ テイル シホ ヤ アマ タダ

ツヨク 面も白うゆそや つぎ 南をさる

え渡せむ雲ふ續ける紀の川乃小橋

ヨク 由良の戸渡る早舟の志ほ追風の

吹よや トホ 浦ながら住者と

松を飛ぬ海越の シホ 老翁の波や

昆陽新波 つぎ 名もい給うと

ながら いくさ筆にも及ぶま

のら面白の浦の鮮や 日 実や

あり海を 築れ 坂を とや 淡路 深

阿波 沖舟の 漕くも ぬごさめれ 今

一せりも 汐を 汲め や人 ぐ

上 小 謠 そよや 陸奥の 子 笑の

塩竈の 名の くるて きけれ ぞい

運ばん 伊勢 崎や 阿波 紀が 浦の

汐を 一度 まで も 汲 難し 田子 浦

の 汐を たし ざり たらん わくらは 是

閑人 者ら ば 口ふ と 茶を て け 汐の

浦の 汐 汲む ば 海 七 浦の 汐 くるん

いふは境之内、^{コト}東内中

渡りぬぞ ^{コト}旅の者にして

一、^{コト}我の宿と云ふ

待てぬ ^{コト}其由や

いふ ^{コト}旅人の一、^{コト}我れお宿と仰け

何と ^{コト}旅人のお宿と云 ^{コト}な

仰け ^{コト} 仰け ^{コト} 旅の者 ^{コト} 旅の者

いふ ^{コト} 浦 ^{コト} お宿 ^{コト} 旅の者

いふ ^{コト} 浦 ^{コト} 旅の者 ^{コト} 旅の者

異浦 ^{コト} 旅の者 ^{コト} 旅の者

将 ^{コト} 異浦 ^{コト} 旅の者 ^{コト} 旅の者

いふ ^{コト} 浦 ^{コト} 旅の者 ^{コト} 旅の者

下^レも 仰^レを^レに^レて^レゆ。 清^レら^レい^レお^レ宿^レを^レい^レあ^レら^レせ^レら^レう

おほせ モツトモ せ^レら^レふ^レく^レの^レ 扱^レを^レい^レう^レ 成人^レに^レて^レ入^レり

作^レぞ ^{コト}下^レ け^レ君^レと^レカ^レス^レ ^ア上^レ ^ア天^レが^レ下^レに^レ 双^レび

な^レま^レき^レ 比^レ野^レ色^レ 翠^レの^レよ^レま^レふ^レく^レ ^レ入^レり

一^レ年^レ毎^レの^レお^レ祈^レりの^レ為^レに^レ神^レ泉^レ苑^レふ

於^レて^レ秘^レ曲^レを^レ遊^レば^レされ^レり^レ ^レ神^レ神^レも^レ是^レに

め^レで^レける^レ ^レは^レい^レもの^レ 晴^レ天^レ 俄^レふ^レ日^レ曇^レり

大^レぬ^レ後^レ事^レ終^レ日^レ也 ^レま^レま^レし^レて

け^レ君^レと^レ雨^レの^レ大^レ后^レと^レも^レ ^レカ^レス^レ ^レや

た^レ極^レの^レ人^レ ^レ心^レ宿^レを^レと^レま^レら^レせ^レて^レ ^レ社^レ例^レ

な^レま^レき^レ思^レひ^レが ^レ日^レ ^レ彼^レ蟬^レ丸^レの^レ逢^レ坂^レや

昔^レを^レ今^レに^レ 現^レ存^レを^レ 夢^レに^レ 今^レに^レ 君^レの^レ

上
 階の塩屋も溜らじ朝の板も
 多し歌も御ふつそを嬉しくける
 屋離れ漁師の家床はあひそく
 何事をも松の粒や竹編める垣に
 にて風もたやまらじ慄もや海に
 をけれが浪は愛持よ笑まきて

づのるふ友よもが寝ておこし
 夫も寝てをを寐られぬはよ
 せや我等も猶ゆへに我も猶
 中へー けん茶うりかお宿を
 らせてい今宵は月も面白うり
 夜もすがらに寝てをを寝て

心と、慰やまらうずらふこゝろ コタ 心持

カシハ 師長 上け、浪、磨の巻、七、秋、うとよ

源氏此浦に流され、泣き、始めて世の

幸を、知、とい、海、と、境、志、や、ぬ カラ

世の、習、ひ、お、く、を、か、り、な、る、心、の、あ、は、れ

玉、小、琴、を、挑、唱、ら、ん 秋中 意、侘、て コヒ

泣、き、に、ま、が、ふ、浦、波、の、思、が、方、より

風、や、吹、ら、ん 日 上、ま、浦、波、の、意

通、ぶ、ら、し、琴、の、意、を、 サ 上、リ、ま、浦、波、の、意

琵琶、の、お、か、ら、な、れ、や、村、女、の、ふ、ら、な

の、朝、に、板、敷、目、受、す、程、の、教、さ、め、や ウ 上、ク

後、弦、の、障、り、な、る、ら、ん 何 と、て

の親類と弾きつけていぞ コ見 唯今

の志海ふより弾ききききい

さらばははをいあー板屋の上を葺。

ちびこり成りもやうまゐるにいてい

いぎく板屋を葺んともい。親父と

祖母の諸をふ つ かくて板屋の

其上を し 板をい し ちと

ふき 何上メス 電の各れちうぐと

あつ身をとそい シホ 謝居たり

何とて漏らぬ板屋をい コ見 板にいてハ

葺き し 今

ぬれ板屋を敷く シホ 盤渉なり。

水調子、黄鐘にてゆ、^{ツウ}管にて
 板を^{カク}葺、^{カク}思、^{カク}今、^{カク}持、^{カク}調子よ
 成て、^{カク}少、^{カク}され、^{カク}を、^{カク}始、^{カク}め、^{カク}を、^{カク}ま。
 此、^{カク}史、^{カク}な、^{カク}ら、^{カク}び、^{カク}思、^{カク}ひ、^{カク}ふ、^{カク}九、^{カク}指、^{カク}や、^{カク}え、^{カク}さ
 琴、^{カク}を、^{カク}い、^{カク}ぞ、^{カク}か、^{カク}弾、^{カク}で、^{カク}何、^{カク}る、^{カク}毎、^{カク}日、^{カク}ヤ、^{カク}ア
 変、^{カク}ら、^{カク}江、^{カク}の、^{カク}ま、^{カク}り、^{カク}若、^{カク}越、^{カク}す、^{カク}波、^{カク}の、^{カク}ま、^{カク}や、^{カク}

せん、^{カク}を、^{カク}琴、^{カク}の、^{カク}思、^{カク}ひ、^{カク}も、^{カク}よ、^{カク}ら、^{カク}ぬ、^{カク}は、^{カク}度、^{カク}
 う、^{カク}あ、^{カク}は、^{カク}思、^{カク}ひ、^{カク}も、^{カク}よ、^{カク}ら、^{カク}ぬ、^{カク}は、^{カク}度、^{カク}
 お、^{カク}親、^{カク}理、^{カク}を、^{カク}た、^{カク}ま、^{カク}い、^{カク}れ、^{カク}を、^{カク}
 ち、^{カク}を、^{カク}調、^{カク}ふ、^{カク}ま、^{カク}き、^{カク}バ、^{カク}
 ち、^{カク}あ、^{カク}ら、^{カク}べ、^{カク}ニ、^{カク}
 ば、^{カク}ら、^{カク}ま、^{カク}が、^{カク}ら、^{カク}り、^{カク}ニ、^{カク}ら、^{カク}ま、^{カク}を、^{カク}ら、^{カク}り、^{カク}と、^{カク}
 祖、^{カク}母、^{カク}琴、^{カク}柱、^{カク}を、^{カク}
 板、^{カク}を、^{カク}肌、^{カク}を、^{カク}
 祖、^{カク}父、^{カク}を、^{カク}

感激もあはれ嬰女も踊る斗り
なりぬ強きさりく
面白やヤア
兼入習ナリ

師長
師長思ふ極く我日の本にて

琵琶の真依を極め流る大玉を

窺もんと思ひ一車の浅がり

さよや海のつらりから思結あり

ける事よふ給渡座を止まらんと

恐びて陸座を方強くまをを和

ふらふら琴の心ひとつれを日に

越天樂の唱歌は声押上梅が枝よ

了我ツヨク常の樂をく風ふらむ

いふせん花よふ常の常り人の

^{トミテ}海をよむ志らでツマ彈ツマころり琵琶ト志と

^ト何とて大信殿ハツハツツ久クなナくクゆユぞ

^ツまマやヤのノまマにニてテゆユ ^{ヨ上}何とて留ルめ

^トまマさサぬヌぞゾと ^ツ祖ソ父フとト祖ソ母モのノまマより ^{スチル}

^{カタク}琵琶ヒ志シ志シとトよりリもモ袖スをヲ唾ツひヒけケや

^{ヨ上}引ヒくク横ヨをヲまマのノ板イまマとト深カ浦ウはハまマ

^ト何ナニとトいイふフはハ ^{師長上}何ナニとト留ルめメはハ

らラんン先マはハ度タのノ海ウ路チしシとトまマぬヌてテ尋タ

かカへヘとト名ナをヲ名ナ祭マめメのノやヤ ^{佐上}今イマハ

何ナニとトいイふフはハ ^ツ我ワらラのノまマにニてテしシ

村ムラ上ノのノ天アメ皇ノ親ミコ玉ノのノ女メ部ノ主ノ婦ノなりナリ

栄エ々々入イ庭ニとトめメんン為タるル友ト申マふフとト

日

須戸の浦故院の昔よる友乃造思
心あよ人ごとくかき消すやうに
失ふたり
天皇と我事也生靈時代の流字
かよる者土より二面の琵琶を
渡さる青山を上柳子丸を也

雷序中入

出端上

いざながして弾せんと漫たる
海と日向ひ糸下界は能神遊糸
きけ柳子丸持糸仕つき
柳子丸字ぶと見えかた
犬籠女を連く彼は琵琶を
授け給へも原長賜らまはす

日
上
ス
ム
ノ
ル

後上

中

大龍王もシツメ弦シツメ波シツメの殺シツメと或シツメは波シツメの
 鼓シツメとらへてシツメを或シツメは鼓シツメの音シツメにお
 獅子シツメ圓シツメ丸シツメ旋シツメ子シツメ村シツメ上の天シツメ皇シツメも奏シツメて
 弦シツメふ面シツメ白シツメかりシツメける秘シツメ曲シツメりシツメあシツメ 早舞
シツメ獅子シツメにシツメ文シツメ珠シツメやシツメ浪シツメるシツメ鏡シツメ 日
シツメ帝シツメの飛シツメ舟シツメの車シツメにシツメ乗シツメりシツメ大シツメ龍シツメ馬シツメ

小シツメ龍シツメ王シツメもシツメ弦シツメ波シツメの殺シツメと或シツメは波シツメの
 鼓シツメとらへてシツメを或シツメは鼓シツメの音シツメにお
 獅子シツメ圓シツメ丸シツメ旋シツメ子シツメ村シツメ上の天シツメ皇シツメも奏シツメて
 弦シツメふ面シツメ白シツメかりシツメける秘シツメ曲シツメりシツメあシツメ 早舞
シツメ獅子シツメにシツメ文シツメ珠シツメやシツメ浪シツメるシツメ鏡シツメ 日
シツメ帝シツメの飛シツメ舟シツメの車シツメにシツメ乗シツメりシツメ大シツメ龍シツメ馬シツメ

服飾ノ時ハ前ノてきノ一ノ声ニナリ
 切馬シツメ上シツメよシツメびシツメえシツメをシツメ携シツメへシツメてシツメ返シツメレシツメたシツメづシツメさシツメへシツメてシツメ「シツメトシツメリシツメ」シツメニシツメ唄シツメフ
 番組ニ松風有之ハ節ハつきノニノ勺シツメたシツメノシツメ通シツメリシツメ替シツメテシツメ唄シツメフ
シツメヨシツメ上シツメはシツメとシツメ形シツメまシツメきシツメ業シツメをシツメ浪シツメテシツメのシツメ浦シツメ ニ人月シツメさシツメへシツメ湯シツメる

...

...

融

梗概 (所) 京都六條

(季) 八月

諸國行脚の僧あり都に上り六條河原院にて暫し休らふ處に田子を擔ひ
 たる老翁出て来り、此所の汐汲みなりと云ふ、されば海邊にてもなきに汐汲みとは
 不審なりと問へば、此の所は昔融の大臣陸奥千賀の塩竈を摸して造れる処なりと
 答ふ、折しも月の出でければ、難が嶋の致景を賞し、融の大臣の故事を語り、さては四
 方の名所など教へてありしが、長物語よしなして、汐汲む様と見えしが、其ま、姿
 を消しぬ。僧に奇特を待つ心にて一宿する程に、夢の中に大臣の靈現はれ、遊舞様
 々なりし昔語りをなし、夜もすがら舞なとまひてありしが、明け方と共に再び姿は
 消え失せけり。

融 (切能)

ワ キ 林 僧	後 シ テ 融 ノ 大 臣	シ テ 老 翁	役 別
着流姿(白帽子) 着付無地髪干目 水衣 腰帶 数珠 (前)	腰帶 扇	田子 扇(後ニサス)	装束附
	面中将 色鉢巻 初冠 着付竹箔 込大口 指貫 狩衣(小直衣ニシ)	面三光尉(朝倉尉ニシ) 尉鬘 着付無地髪干目 水衣 腰帶 腰裏	

融

是、諸國一見の傍にては我未だを
 見ぬは復ふ唯今却へ上りし中思ひを
 こそ志るべきをこそけしめしと渡り
 山を越へ子裡も同く一足は子裡も
 同く一足は上夕べをさるねぬ海の

宿の名残もなまぬておぼ

ましく思ひたり

月もまやが汐ふなりて地蔵の

浦さびよるる夕ま

何烟のまじり地蔵のうらみて渡る

をがめよるるまじりや定ぬなり

おももあるあの面よ思月かて残
かぞふまはるる秋の空の中なる
実や移せ地蔵の月も秋の空の中
のまはるる秋の空の中なる
毛泳志ららぐま
まじりのまじりぞ
まじりまじりのまじりぞ
まじりまじりのまじりぞ

秋と流る時毎に松の風を我々の
 の上と汲て来る シホナレプロモサム 河原衣神を
 浦まの秋の夕家 シハタク 誓
 体よをやと思ひ コカ いふ尉殿
 身はけつらうの人まで海へまはら
 はんがけおの塩汲に コカ ぬ
 と

きやあまの海までにもなれたる
 汲と流るる尉殿 アキラ 意何
 なや コカ 扱は コカ ぬ コカ の コカ ぬ コカ ぬ コカ ぬ
 けぞ コカ ぬ コカ ぬ コカ ぬ コカ ぬ コカ ぬ
 河原の院とや コカ ぬ コカ ぬ コカ ぬ
 河原に院 コカ ぬ コカ ぬ コカ ぬ コカ ぬ コカ ぬ

MS. A. 10

114

子かまの塩竈を移されし。都の内は
海もたのまき。各ふる流きたる。海家の
院は。河ありとも。汲め池ありとも。く免。
安塩の浦人なら。塩汲となむ。
笑さぬそや。 コ免 実と陸奥の子かまは
塩竈を都の内へ移されし。と。い。ぬ。
ウツクマリ

及ぶ。い。ぬ。の。ま。きたる。い。ぬ。離が。つ。の。り。
さんいあれ。我の離が。つ。の。よ。融乃
大信。常。い。の。船。を。あ。ら。ま。は。酒。家の
お。お。松。が。成。し。お。なり。や。月。丁。地
お。て。ゆ。 コ免 今。月。の。お。ら。そ。や。
面白や。何の離が。つ。の。棧。の。枿。ふ。ま。の。

ALL RIGHTS RESERVED

宿しづりて。四にふるる月影を
 中 孤舟が海がまのよかと思ひがられ
 今これ酒家のまきを
 幸見古人の心ははるる身よ
 海といふ者も賈誼が言ふやん
 上 多に宿も池中の樹 像に教く

月下の心は 推し 教く
 故人は 今目の秋音あり
 小 上 日 実やたしも月ふるふ笑は壇電の
 浦の秋も半にして松風も
 空なるやあは海がまの心は
 我もさ海がまの心は

小 上 日

上

子笑れ浦守と^ト眺めむ^トやちらの浦守
となが^トあむ^ト ^{コト}程陸奥れ子笑
の塩竈を^トおの内ふ^ト殺されたる^ト謂
心物^ト活^トり^ト ^ト後^トて^ト中^トの^トせ^トや^トい^トべ^ト
昔^ト^レ^{カニ}^レ我の^ト天皇^トと^ト御宇^トに^ト融^トの^ト大^ト法^トと
かし人^ト陸^ト奥^トの^ト子^ト笑^トれ^ト乃^ト塩^ト竈^トと^ト眺^トめ^トむ

を^トあ^トが^トる^ト及^トび^トせ^ト給^トひ^ト何^トの^ト難^ト波^ト乃
この^ト浦^トよ^トる^トも^ト日^ト毎^トに^ト潮^トを^ト汲^トせ^ト
爰^トに^ト汝^トを^ト焼^トせ^トつ^ト一^ト生^トの^ト後^トり
と^ト志^ト給^トふ^ト生^ト後^トに^トお^ト續^トして^ト死^トぶ^ト人^トも
な^トけ^トれ^ト浦^トに^ト生^ト終^トて^ト浮^トと^ト成^トて^ト地^ト
邊^トぶ^トよ^トも^ト海^トり^ト水^トの^ト残^トりの

古^レ江^中深^ク 藻^{オホキ}葉^ハ交^ヒ浮^ク 松^ノ松^ノの
月^ハだ^レふ^も 霞^ノで^レ秋^ノの^風も^のも^も残^ル
む^らり^なり^はき^く 歌^もも^も 君^ハ海^ノさ
で^レ煙^ノ里^ノ 寂^し 境^ヲ海^ニ浦^ノ林^ノも
見^込つ^ても^も 家^ノと^も 費^ノ之^も 録^テい^は
実^ヲや^飛む^き 月^ノの^とみ^を 境^ノ海^ノの[。]

浦^ノ寂^しく^も 愁^ノ思^ノる^心の^世も^もも
境^ノを^て 卷^ノの^浪も^海を^らん^あら
昔^ノ愁^ノや^上 恋^ノや^と
暮^シ入^ルも^も 愁^ノが^らひ^も 緒^ノの^浦も^も
昔^ノの^こな^く 斗^りな^り
唯^レ今^ノの^こ物^は 俗^ノも^も 流^ノ 涙^ハ 付^りて^い 扱

足はられたるふら、皆名所にてはら
 さんど路名所にてはら、皆尋ふる名所
 せん ^{コル} 先河 ^{コル} 名所にてはら、皆尋
 せん ^{コル} はん ^{コル} あれ、皆名所にてはら
 よ ^{コル} 皆名所にてはら、皆尋
 関の仕方にて詠たれ、皆名所にてはら

近うて我々ならめ ^{コル} 御の如く関の
 仕方にてはら、皆名所にてはら
 せん ^{コル} 皆名所にてはら、皆尋
 せん ^{コル} 皆名所にてはら、皆尋
 せん ^{コル} 皆名所にてはら、皆尋
 せん ^{コル} 皆名所にてはら、皆尋

くのきよたの中山清深寺中今慈野
 とのきよたの中山清深寺中今慈野
 多良連村の木の立ステル 木立コダチ 木立
 急げよ秋をせよ海に死時毎の秋なれば
 上 秋も青き稲荷山コダチ 風も青き
 雲の端乃梢ふ志方まき秋の文ステル

今を秋よ名にわく上 雲の端乃梢ふ志方まき秋の文ステル
 友の表コダチ 翠りの空も秋深き
 野山に續く里はふる 秋の文コダチ 秋の文
 冬されば 秋の文コダチ 秋の文
 志方まき 秋の文コダチ 秋の文
 新崎なる 秋の文コダチ 秋の文
 深草山コダチ 秋の文コダチ 秋の文
 木幡山コダチ 秋の文コダチ 秋の文
 付中 秋の文コダチ 秋の文

たりや^ヤ眺^{ロシキ}め^キ中^マる^ラ其^ミ方^ハは^シ空^{ソラ}に^ニ白^{シラカ}き^キの^ノ
 早^{ハヤ}き^キ初^{ハジメ}る^ルき^キ山^{ヤマ}の^ノさ^サも^モも^モ深^コく^ク
 多^{オホ}る^ルハ^ハい^イつ^ツ成^{ナリ}下^シあ^アる^ルらん^ン
 こそ大^{オホ}き^キや^ヤ小^コ境^{サカイ}の^ノ山^{ヤマ}も^モ久^{キウ}お^オつ^ツ我^ワら^ラ
 ち^チ鏡^{カガミ}に^ニ初^{ハジメ}は^ハら^ラめ^メ物^{モノ}を^ヲ感^{カン}を^ヲ給^{タマ}へ^ヘや^ヤ
 上^{ウヘ}日^ヒ 聞^キよ^ヨ分^ワて^テも^モ秋^{アキ}の^ノ月^{ツキ}思^{オモ}ひ^ヒな^ナま^マき^キや^ヤ山^{ヤマ}

續^ツき^キ雲^{クモ}の^ノあ^アる^ルに^ニ何^{ナニ}も^モな^ナし^シあ^アま^マ
 毛^{モウ}を^ヲや^ヤ秋^{アキ}も^モお^オお^オし^シた^タめ^メ松^{マツ}の^ノ尾^ビは^ハ
 嵐^{アザナ}も^モい^イつ^ツも^モあ^アら^ラう^ウ 中^{ナカ}日^ヒ あ^アら^ラう^ウ 交^マり^リ
 秋^{アキ}の^ノ夜^ヨは^ハ空^{ソラ}ま^マま^マの^ノあ^アる^ル月^{ツキ}影^{カゲ}
 さ^サす^ス潮^{ウシ}時^{トキ}の^ノあ^アる^ル日^ヒ 葉^{ハエ}も^モあ^アら^ラう^ウ
 照^テ月^{ツキ}に^ニあ^アる^ル日^ヒ 奥^{ウラ}も^モあ^アら^ラう^ウ

牙をば実ヤ忘れり秋のぬれ長
 物落しツおやまのいよむ汐を汲ん
 とて持ツや田子の浦河のいからげ乃
 汐衣シ汲ツむ月ツをも袖ツもち汐の
 丁ツふ海ツ浪ツれよるの志人ツはらり
 志ツ不ツ累ツりツにかた跡ツまを思ツふんば

ツ長

我ツふかりツ泣ツをもんせぬ成ツよちりツ中ツ入
 故ツ枕ツ若ツの衣ツをけあてく岩根
 乃ツ海ツに救ツもまツからツ物ツも奇ツ持ツを
 みるツとツるツ友ツ待ツがツ不ツのツ旅ツ持ツのツ中ツキ
 忘れてツ年ツをツ経ツしツ物ツをツ又ツちツふ
 海ツ浪ツのツ志ツ不ツ累ツのツ名ツあツおツお

出端上

今宵の月をいぢむるはなは浦の
のまをいぢるはなをいぢるはなを
融の大匠といぢるはなをいぢる
心をいぢるはなをいぢるはなを
名月ふ舟をいぢるはなをいぢる
神もいぢるはなをいぢるはなを

津やささやうららさの袖
な枝の枝に
をいぢるはなをいぢるはなを
の波乃何ら面白や曲水の盃
たり神さうらな夜早ガリの袖洞改あら
面白の神楽や

其^レ津^ノ浦^ノよ^シも^シ初^ノ月^ノの^ヨる^ノに^シ船^ヲと^モ婆^ト
 ま^シく^シな^レた^レい^ハ成^レ習^キな^ラん
 夫^レハ^シ洒^シ油^ニ入^リ日^ノの^ヨま^シで^シ近^クれ^ハ
 生^レ糸^ノは^シ徳^ヲさ^シる^ノ船^ノ月^ノの^ヨる^ノ夜^ハ
 早^クの^ヨる^ノも^シが^シ如^クな^リ青^ク陽^ノの^ヨ
 春^ノは^シ始^メふ^レも^シも^シ花^ノむ^シ々^ノの^ヨま^シで^シ
 仕^上舞^上

付^テ日^日
 試^シ美^ノの^ヨる^ノに^シ日^ノ月^ノの^ヨる^ノに^シ船^ヲと^モ婆^ト
 ま^シた^レと^シり^ハ又^シ水^中の^ヨる^ノ夜^ハ
 釣^リ舟^ノと^シ類^シひ^ハお^シ上^レけ^レ花^ノも^シら^ん
 下^下ら^レの^ヨる^ノに^シ教^ヲ馬^ノく^シ一^チ編^ノも^シ海^ノ
 ら^レん^ハ万^ノ水^も昇^らん^ハ魚^ノ月^ノ下^ノ
 池^ノ邊^ノの^ヨる^ノに^シ宿^ル魚^ノ月^ノ下^ノ

波よふま 日 空もつら秋のよめ

多もも啼 日 撞もつきて 月

毛もや 日 新頃きて明か

△追善
唄フ
まもと成あど成け老候ふ誘はれて

月也於ふ入強ふ粧ひ急名残惜の

面影や名残惜のおもむりぢぢ

妻 戸

梗概 (所) 比叡山

(季) 七月

延曆寺法性坊の律師僧正は天下御祈禱の為百座の護摩を焼く、満参の夜灯の影に怪したる人の姿現はれ、我は菅相承の靈なりといふ、座主珍らしく思ひ請ひければ、相承は我が没後座主より追弔をうけしを謝し、又生前師恩の厚きに報し難き由など語りてありしが、相承詞を改め、我無實の罪にて果てしは時平の讒奏なり、思へば怨めしと言ふかと思はれ、俄に氣色變し、本尊に手向けあり、柘榴を取つて嚙み碎き、之を妻戸に吐きかけしに、柘榴は忽ち火焰となり、扉に焰之上りぬ、されども僧正騒がず、灑水の印を結び、錢字の明を唱へければ、火焰は消え、其儘相承の姿は消え失せり、かゝる処に音楽聞え、菅公の神靈天満天神出現し給ひ、神と君との恵みの有難きをことほぎ、天長地久を祝ひけるとぞ。

妻 戸 (切 略 能 三 能)

役 別	装 束 附
シ ナ 管 相 丞	面 怪 士 (三 日 月 ニ モ) 白 鉢 巻 黒 頭 着 付 厚 板 袴 狩 衣 色 大 口 腰 帯 扇
後 シ テ 天 高 天 神	面 中 將 初 冠 (梅 枝 カ ス) 色 鉢 巻 着 付 箔 單 狩 衣 込 大 口 指 貫 腰 帯 扇
ワ キ 坊 尊 意 僧 正 性	角 帽 子 着 付 小 格 子 水 衣 白 大 口 腰 帯 数 珠 扇
ワ キ ツ レ 從 僧 ニ 人	大 口 僧 (ワ キ 同 装、 但 シ 着 付 無 地 髮 半 目)

妻 戸

^ツ位^上是^コ此^ニ處^ニ山^ニ延^ス曆^ニ寺^ニ住^ス座^主法^性
 坊^ノ律^師從^僧心^にて^ハ相^も可^き
 天下^レ此^レ祈^禱の^為百^千の^後摩^多
 と^焼き^し今日^ニ後^系に^てハ^行ま^よ
 ね^てに^王命^を執^行は^ませ^とお^り

ヨ上
家や意もつらたある。新も日者の
年ふりて フキ倍 松をひそ深き胡也

小○ヨ免 浪よする丁の月 ニ人 名はし

お比叡の御嶽は秋をきやく

月隈なき名跡の都乃あま

三上山 法の灯火おの川から

新からけきあまそ人を渡さぬ

松をひなき シノ上 家を離る

三四月はあまは百子行万事ハ

皆夏の如し現とつるも定な死

有年の焼ひ苦悪の二河其也鏡を

見るに定まらばうはらま女まを

旅宿なり

〜美やを親志

所行此眼の如ふ一物又〜

さるに起たる人のつくはる部乃

変化のまほひやらんと心を渡す

斗りなるも たるは女へ替るも

當ふふ交々〜とてききとをたのふ

情なる〜及中て対面中さん為ふ

至おそき〜事〜

事のみ〜は〜能〜んれをこい

いふ〜も至おにて満〜るや

を〜と〜月の〜

客人の〜 稀〜時〜

後の地としていやるその業は
 上人も悲おもひもけて物ほせ
 娘一もふそ見へ娘あられ同
 世の世せとさそ思ひあや
 此の身ハ舞舞系にて采娘ひさる由
 承及てゆ程よを吊ひやしてゆぐ
カケタマリ

通てゆやらん
 中この事

此吊ひ悉く通て有程ら
 秋は後るを系ハ月系ふ及易く
 愁をとあらぬ洞とさるに花流
 中されは中もさハ作方の約
 主従 聴きま親子の契なり
シウリ
上
コ免
ウレヒ
コ免
ナシタ
コ免
シウ
ジウ
ムツ
オヤ
コ
チキ
ワ
コ免
メツ
ナル
ハ

燃えつゝる^{サレシ} 借正^{カサ} 後^{ノチ} して^{シテ} 燐^{リン} 燐^{リン} 燐^{リン}
 も^モ 海^{ウミ} にお^ニ さい^{サイ} 酒^{サケ} 氷^{ヒヤ} の^ノ 原^{ハラ} を^ヲ 流^ナ ん^ン て^テ
 鍍^メ 字^ジ の^ノ 明^{アカ} を^ヲ 輝^ヒ け^ケ 延^ノ び^ビ 火^ヒ 燄^{エン} の^ノ 消^ク える^ス
 煙^{ケムリ} の^ノ う^ウ ち^チ に^ニ 立^タ ち^チ 立^タ ち^チ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ
 志^シ ら^ラ せ^セ 決^{ケツ} 然^{ゼン} 然^{ゼン} 然^{ゼン} 然^{ゼン} 然^{ゼン} 然^{ゼン} 然^{ゼン} 然^{ゼン} 然^{ゼン} 然^{ゼン}
 雷^{ライ} 考^{コウ} ア^ア リ^リ
 中^{ナカ} 入^{イリ}

神^{カミ} と^ト 成^{ナリ} 給^{タマハ} ひ^ヒ を^ヲ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ
 と^ト の^ノ つ^ツ ら^ラ さ^サ な^ナ り^リ と^ト 家^{イヘ} 後^{ノチ} の^ノ 若^{ワカ} と^ト
 物^{モノ} も^モ 奇^キ 特^{トク} を^ヲ 松^{マツ} 梅^{ウメ} の^ノ 権^{ケン}
 清^{スガ} き^キ 月^{ツキ} 新^ニ も^モ 人^{ヒト} 待^{マツ} 白^{シロ} 此^{コノ} 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ 延^ノ び^ビ
 出^デ 湯^ユ 上^{ウヘ} 柳^{ヤナギ} 是^{ココ} は^ハ 天^{アメ} 満^{ミツ} 天^{アメ} 神^{カミ} と^ト
 賜^{タマハ} 給^{タマハ} を^ヲ 賜^{タマハ} を^ヲ 祈^{イノ} せ^セ 菱^{ヒシ} 乃^ノ 大^{オホ} 臣^{ミコ} の^ノ
 出^デ 湯^ユ 上^{ウヘ} 柳^{ヤナギ} 是^{ココ} は^ハ 天^{アメ} 満^{ミツ} 天^{アメ} 神^{カミ} と^ト

神レ靈ハなりリ。可レれハ君ノ思ハのハ糸ハなリを。
 いハさハりハ報セんハはハ為ス不レ峰ノ今ハ愛ス
 歌ヲをキきたリたりカ。日上ルニ其ノ時ハ虚ニ空ニふ
 後ハ弦ハ少シカニ神ノさハびハ後ニ身ヲる
 折ラがラなレれハをハ秘ニ曲ヲをハ奏スてハ教
 終ル日ハ花ノかギてハ時ヲめル也ニ
仕舞終ル日ハ花ノかギてハ時ヲめル也ニ

一 薰ハりハハハ四ノ方ニにハのハまリてハる。
 神ノ靈ハ水ノ野ニとハ移ラをハ終ル也ニ。
 實ニ有リ難ヤ神トとハ君ノ天ノ長ニ地ノ久ク限カ。
 不レあリくハ幾ノ子ノ代ノもハもハ学ノ深ニのハ春ノの
 いハくハ子ノ代ノもハもハさハりハ終ル也ニのハ神ノのハ松ノ也ニ。
 そハつラたハ終ル也ニ。

△ 附祝言
ニ 唄

八

海人

梗概 (所) 讃州志度

(季) 二月

房前大臣は志度の浦にて空しくなりし母御追善の爲め彼の地に下りぬ。こゝに一人の海人來れり。逢ひ言葉を交はし給へば、海人語りて云ふやう、唐の高宗皇帝は淡海公の御妹を后に迎へられ、華原啓、泗濱石、面向不背の珠の三宝を興福寺に贈られし時、珠は此浦にて沈みければ、淡海公身を僂して此浦に下り海人と契り給ひて一人の男子をまうく、此の子を世嗣の位になすべき約束にて海人は身を捨て海に入り龍宮より珠を取り返したり、その子即ち房前の大臣よと言ひければ、大臣も懐しく思ひ召され、我が身を明かされ、こゝに海人の亡霊は曾て珠を潜き上げし様を學びてありしが手跡を遺し置き、回向を頼みて遂に波に消え失せけり。恰も母亡くなりて十三回忌に當れば、供養をば營みけるに、亡霊現はれ經文の功力にて成佛せるを喜びしなり。毎年志度寺にては講を營む例とはなりぬ。

海人 (四五番目)

役別	装束	附
シテ海人	面曲見 髪 髪帯 着付箔 腰巻縫箔 腰帯 水衣 扇 飾 みるめ	
後シテ龍女	面泥眼 黒垂 龍 龍臺 着付箔 色大口 舞衣(長絹ニモ) 腰帯 扇 短巻	
子方 房前大臣	金風折鳥帽子 着付箔 白大口 長絹 腰帯	
ワキツレ 同三人	着付段敷千目 素袍上下 小刀 扇	
	ワキ同装(但し無地髪千目)	

海人

^{御連三人}
^{ツ上}
^{ツ身}
 有るぞ名残之日月此へ下
 西に急ぐん 天地の開けし恵
 久遠の天に児を根の心縁り
 子方 房前の犬屋と我事なり扱も
 母の涙列志渡の浦房前

中 己死
 追々々々もなまはやくと心ひら
 と承りてゆくたもまを被浦ふ下
 習いぬ旅と奈良坂やぐり旅の
 山隈を春の産を恨めしき
 上
 三笠を山今ぞ栄へんは岸は今ぞ

栄へむは海は南は海と急ぐんと
 那を箱なく津の玉やこや日た本の
 けじめなるは路の渡り末近く
 那の津ぶきまをら泊り定めぬ
 那を箱なく
 那を箱なく
 たらちねれ為とおありを急ぐれて

中

日・救・授・け・は・あ・ま・の・宮・あ・ら・ひ・る・と・な・く
 新・船・ふ・名・に・の・こ・ま・し・改・波・の・玉
 房・前・の・浦・よ・志・に・か・り
コ 志・は・程・ふ・是・も・や・房・前・の・浦・よ
 志・に・て・は・又・あ・れ・と・ま・き・男・女・の
 志・別・志・も・人・一・人・来・り・は・彼・と

待・の・り・せ・も・は・尋・ね・ら・る・に・て・ふ
 先・か・う・は・座・ゆ
一 海・士・の・列・は
 藤・と・住・中・ふ・何・ら・程・を・我・ら・海・を
 袂・か・は・は・志・渡・の・浦
 寺・近・け・れ・た・を・な・ま・の・里・乃
 海・人・ふ・て・は・実・や・名・に・お・ぶ・は・坊・男

此の我をたげられ者天智天皇の
 御宇に唐より一川の明珠を渡
 されしをい神ふく龍神にさられ
 づきあげし浦のツ上日ハのイま
 みの月を海潮乃シくコらメを
 せむシらフよリ カガキ 誓玉シ潜上アもゲ

け浦の延々とやう コカ さんぶけ浦の
 延々とやう コカ ねその海士イにハ
 何れの程ぞ コカ 何者なるイとハ海士
 の里とやしもけ浦一川のド名コなるリ
 又是成るを新珠シとハもハ彼玉を
 潜き上始カ見カ免カ々カるカに依カて。

新珠崎と申す コト 扱其玉の名を

何と申しけるぞ 一々女 玉中に釈加の

像海もまた何方より扱めを因に

おりてなるに依て 面向不背の玉と

か コト 扱か程の宝を何として

漢朝よりも渡しけるぞ 一々女 今の

大后淡海公の御妹は タシ 高宗

皇帝の后ふまは キヤク 氏寺な

まを コト 興福寺へ コト の宝を オク 贈

らる コト 花巻 コト 面 コト 不背の

玉 コト 三川の宝 コト 系 コト 一 コト 珠 コト 計 コト 仲

にて コト 神 コト 取 コト 大后 コト 身を コト 取

浦ふり下り、^{イヤシキ}後、^{アマ}處女と、^{チギ}契を
こゝろ人れ、^{コウ}子を儲け給ふ。今、^{子方}あ
房前の犬屋とらや、^{付テ}中あ、^{子方}我を
ぬきぎ、^{シメ}女の犬屋よ、^{シメ}何らな、^{シメ}何れ
^{シメ}案人や、^{シメ}程、^{シメ}流りぬ、^{シメ}今、^{シメ}迷ひよそ
事と、^{シメ}世、^{シメ}思ひ、^{シメ}ひ、^{シメ}ふ、^{シメ}ふ、^{シメ}い、^{シメ}は、^{シメ}家の

^{子方}とを、^{子方}かけ、^{子方}けるぞや、^{子方}何ら、^{子方}流けたあ、^{子方}ハ
^{ヨ上}うづから、^{ヨ上}犬屋の、^{ヨ上}心子と、^{ヨ上}生れ、^{ヨ上}意、^{ヨ上}并くる
^{ヨ上}友の、^{ヨ上}心、^{ヨ上}され、^{ヨ上}も、^{ヨ上}心よ、^{ヨ上}から、^{ヨ上}終、^{ヨ上}事ハ
^{ヨ上}は、^{ヨ上}身、^{ヨ上}踏、^{ヨ上}り、^{ヨ上}て、^{ヨ上}母、^{ヨ上}志、^{ヨ上}ら、^{ヨ上}ば、^{ヨ上}武、^{ヨ上}時、^{ヨ上}功、^{ヨ上}後
^{ヨ上}流、^{ヨ上}り、^{ヨ上}く、^{ヨ上}い、^{ヨ上}を、^{ヨ上}く、^{ヨ上}流、^{ヨ上}な、^{ヨ上}く、^{ヨ上}も、^{ヨ上}母、^{ヨ上}六、^{ヨ上}横、^{ヨ上}刻
志渡の浦、^{ヨ上}房、^{ヨ上}前、^{ヨ上}の、^{ヨ上}何、^{ヨ上}や、^{ヨ上}り、^{ヨ上}中、^{ヨ上}せ、^{ヨ上}ば、^{ヨ上}怨、^{ヨ上}れ

なりとて涙を流す。扱儀後、雲の子。
残の女は、獲り宿りあるり。上女よ。
夫とても、誓ひ来し。志をじ。
宿るも月の光、雨露の慈よ。何らぞ。
やと。思ふを、尋ね来り。さうり。意懐。
かの雲人、やと。涙を流し。給へば。

上女
雲か、なま、海士衣。日。さくらでも。
濡れ、我袖を、さ。ぬて、志を、ま。ま。や。
おけ、な。の。心。事。や。か。ら。雲。人。の。
卑し。心。雲。は。給。内。よ。宿。り。給。も。一。世。
なら。ん。た。と。白。月。の。際。に。梅。り。こ。
光。陰。を。増。し。如。く。な。り。我。等。と。其。

延喜の子孫と答ふかさん事と延喜
我君れ也るまよ然らるる東の夜さ
下^{カド}の口を閉て言ふ水もよおさる
乃名残ばくたきま

延喜人け度いあ海^{コカ}の海よ入てまはる
雨とよあふで目^{コカ}ふ然^{コカ}久^{コカ} 生^{コカ}ふ

かてゆたよ^{コカ}得^{コカ}ふ^{コカ}行^{コカ}よ思^{コカ}ひも^{コカ}あ^{コカ}ら^{コカ}ぬ
事^{コカ}にて^{コカ}い^{コカ} や^{コカ}清^{コカ}から^{コカ}ぬ^{コカ}事^{コカ}
時^{コカ}去^{コカ}然^{コカ}ら^{コカ}て^{コカ}目^{コカ}ふ^{コカ}ら^{コカ}ぬ^{コカ}

今^{コカ}の^{コカ}御^{コカ}子^{コカ}と^{コカ}世^{コカ}嗣^{コカ}の^{コカ}位^{コカ}よ^{コカ}を^{コカ}給^{コカ}たま^{コカ}ふ
彼^{コカ}玉^{コカ}と^{コカ}潜^{コカ}く^{コカ}べ^{コカ}と^{コカ}有^{コカ}し^{コカ}ら^{コカ}子^{コカ}細^{コカ}あ^{コカ}ら
志^{コカ}と^{コカ}願^{コカ}望^{コカ}あ^{コカ}ら^{コカ}ほ^{コカ}ふ^{コカ}ま^{コカ}て^{コカ}我^{コカ}子^{コカ}の^{コカ}為^{コカ}

延喜

捨ん命^{チノ}落^{ツク}程も措^クらじとて^上子^コ孫^ソ
の繩^{ナハ}を^テ腰^ヲに付^ケもし彼^{カノ}玉^{タマ}を^テ流^ス瀬^セ
^{仕舞}たら^バけ繩^ヲを^テ勒^ムる^ルべし^上時^{トキ}人^{ヒト}
力^{チカラ}を^テ活^カへ^テ引^キ寄^セ延^ビと^テ約^ク束^スし^上川^{カハ}の^ナ
利^リ劔^{ツルギ}を^テ扱^ツ持^ツて^ハ川^{カハ}の^ナ海^{ウミ}底^{ソコ}に^テ死^シ入^ルを^テ
空^{カラ}へ^テ川^{カハ}よ^リも^ト波^{ナミ}を^テさ^ガり^の波^{ナミ}を^テ

凌^{ノボ}ぎ^つつ^の海^{ウミ}漫^マ々と^テ分^ワり^て直^{チカ}下^カと^シ
見^ミれ^ば底^{ソコ}も^ナく^も不^フと^りも^ナ知^チら^ぬ
海^{ウミ}底^{ソコ}も^ナく^も神^{カミ}愛^イの^ナさ^もあ^らま^さり^ぬ
得^エん^事も^ナく^も不^フ定^{テイ}な^りに^テ死^シな^らむ^事
死^シり^て宮^{ミヤ}中^{ナカ}を^テ見^ミれ^ば其^{ソノ}さ^もの^ナさ^も二十^ニ
丈^ハの^ナ玉^{タマ}塔^タよ^りか^の玉^{タマ}を^テ大^{オホ}見^ミお^はせ^ぬ

香花を飾りても護神の心就並居
たも生か悪業の口遊れ難
や我命さびが悲恋れ故の方そ
恋もあ浪れ河かさぶそ我子
をの親父だもおいらんさ家
ふもけ後別れ果なん出さ

よと涙ぐいてまた思ひ切りそ
ふと合せ南無や志渡寺の親を
善徳の力を合せたひ強くとて
ス
大慈の利根を願ふあて就は中ふ
死入をた衣く後とそ退たりける
其際ふ宝珠を以て取て遊んと

是れは守護神退却く兼て巧し
事なれ持する細と流す乳の
下をかき切り玉を押し鈍め剣を捨て
ぞ伏しりる就官の習ひふ死人を
忘れぬあたりに通付く悪徒なり
約束の繩を執るを人ぞ怪む

引奉たりけり玉然知らず
海上よ浮ひかたりし女一せつ
おれは悪徒の業をえんてみ舞も
流るる珠と成り玉も流らふあり
まも空愛なり流れと大流歌ま
強く其時息の下よりも各乳の

何事も見え強くとサのたまふサハコフ怪アヤシめ
 入ればツルキ實もツルキ細アヤシくツルキあり
 中ツルキよりツルキ光ツルキのツルキ赫ツルキ赤ツルキくツルキ玉ツルキをツルキさツルキるツルキ
 たりツルキ扭ツルキれツルキ約ツルキ束ツルキのツルキ如ツルキくツルキ法ツルキ身ツルキも
 世ツルキ嗣ツルキのツルキ位ツルキをツルキ受ツルキけツルキ浦ツルキのツルキ若ツルキぶツルキよツルキせツルキて
 房ツルキ前ツルキのツルキ大ツルキ海ツルキとツルキいツルキせツルキ今ツルキにツルキ何ツルキをツルキさツルキり

法ツルキむツルキじツルキかツルキいツルキさツルキしツルキ我ツルキらツルキのツルキ母ツルキとツルキ人ツルキの
 満ツルキ美ツルキよツルキ到ツルキ通ツルキけツルキ業ツルキのツルキ跡ツルキをツルキ流ツルキぶツルキて
 不ツルキ変ツルキをツルキなツルキまツルキでツルキ吊ツルキへツルキ今ツルキにツルキ悔ツルキらん
 何ツルキぞツルキ浪ツルキのツルキよツルキるツルキこツルキそツルキ契ツルキれツルキ友ツルキ人ツルキの
 何ツルキぞツルキ悔ツルキしツルキもツルキ浦ツルキ邊ツルキがツルキ親ツルキ子ツルキにツルキ契ツルキり
 何ツルキぞツルキ志ツルキがツルキのツルキ波ツルキにツルキ唇ツルキをツルキ流ツルキしツルキけツルキりツルキ

波の下に入ふる中入

残コカるカまき

たる子カまき跡をツ上披シユセ見ケ者シ有シらシらシにてケ

披マウ亡ボ母シユセのセまセ路セをセ披ヒラきテ見レた。

魂タマ黄クワウ懐シヤウよクちク一チ十ク二ニ年ニ終ハを。

白ハク沙サ小コ堀ホむム日ジチ月ゲツのノ算サンをセ經キョウ眞シン路ロ

身ミをシてシ我ワとト吊ツらラふフ人ヒトなニ。

君キミ孝コウ行コウあアらラづヅ氷ヒョウ清セイをセ物モノ々々よ。

実ミ史シよりリ十ジュウ三サン年ニ 披ヒラ敷シふ。

恋コイなニしシ吊ツらラふフんンはハ寺テラのノ志シあアる。

身ミ向コウまマ花ハナたタ蓮レンのノ妙ミョウ經キョウをセ見ミた。

をシなニしシ 出デ揚キョウ 嘆ナゲケ 寂シヤク寞マク矣。

人ヒト声コエ 後ノチ上ノ あアらラ有ア符フのノ吊ツらラふフ

波の下

上

やな^ハい^ハの^ハ經^ハよ^ハし^ハま^ハきて^ハ五^ハ逆^ハの^ハ達^ハ多^ハ
 天^ハ王^ハ記^ハ別^ハを^ハ象^ハり^ハて^ハ華^ハ北^ハ女^ハ南^ハ方^ハ
 無^ハ垢^ハ世^ハ界^ハ不^ハ生^ハを^ハ受^ハる^ハ程^ハに^ハ轉^ハ讀^ハ
 志^ハ於^ハ心^ハ一^ハ日^ハ上^ハ深^ハ遠^ハ罪^ハ福^ハお^ハ遍^ハ照^ハ
 於^ハ十^ハ方^ハ一^ハ日^ハ上^ハ微^ハ妙^ハ淨^ハ法^ハ身^ハ具^ハお^ハ
 三^ハ十^ハ二^ハ日^ハ上^ハ以^ハ八^ハ十^ハ種^ハ好^ハ用^ハ在^ハ
 三^ハ十^ハ二^ハ日^ハ上^ハ以^ハ八^ハ十^ハ種^ハ好^ハ用^ハ在^ハ

嚴^ハ法^ハ身^ハ一^ハ日^ハ上^ハ天^ハ人^ハ不^ハ戴^ハ作^ハ就^ハ神^ハ
 威^ハ恭^ハ敬^ハ何^ハら^ハ者^ハ野^ハの^ハ心^ハ經^ハ也^ハか^ハ早^ハ急^ハ
 今^ハけ^ハ經^ハの^ハ德^ハ用^ハに^ハて^ハ一^ハ日^ハ上^ハ

天^ハ就^ハ人^ハ邪^ハ人^ハ皆^ハ遙^ハ見^ハ彼^ハ
 就^ハ女^ハ成^ハ佛^ハ扱^ハ我^ハ徹^ハ別^ハ志^ハ渡^ハ寺^ハと^ハ
 等^ハし^ハ每^ハ年^ハ八^ハ講^ハ於^ハ香^ハの^ハ勤^ハ行^ハ

追善
ノ片ニ
進加ニ
唄フ

佛法無量壽の靈地と成りては孝養と
うをたよひ致

小書 變成男子ノ時ハ後出端ノ致
して此經よりきて變成男子の姿となり五逆の達多ハ唄フ

猩

々

梗概

(所) 唐土海陽江邊

(季) 九月

唐土金山の麓に缸風といへる孝子あり、ある夜の夢に揚子の市に出で、酒を賣らば身富貴となるべしと見たれば、其のまゝに為す程に次第に富貴とはなりぬ。こゝに何時も来りて酒を飲む者あり、盃を重ぬるも酔を見せされは不審に思ひ其名を問へば海中に棲む猩々と名乗りて去りぬ。されば缸風酒壺を備へて又彼の猩々を待ちけるに、月下江上に次女をあらはし、来りて酒を飲み舞ひ興じたる後、御身の心素直なるに、此壺をば汲めども盡きず飲めども絶えぬ泉の酒壺として其ふべしとて、酔ひに乗り舞ひ遊びて去れりとなり。

狸々(切能)

ワ キ 缸 風	シ テ 狸 々	役 別
着付厚板 白大口 側次 腰帶 扇	唐織壺折 腰帶 扇	装束 附

狸々

^{コ免}
 是^{モロコシ}は^{キン}海^{ザシ}上^{ツモト}う^{カウ}称^{フウ}念^{フウ}山^{フウ}の^{フウ}林^{フウ}扉^{フウ}の^{フウ}缸^{フウ}風^{フウ}と
 カス^コ民^コにて^コや。我^コ親^コよ^コ孝^コあ^コる^コ疾^コふ^コや。
 或^{アル}夜^コふ^コぎ^コの^コ友^コを^ココ^コん^コる^コ。是^コより
 楊^ヤ子^コの^コ市^コふ^コか。酒^イ成^サ造^ケり^ケて^ケ賣^ウ
 なら^ラば^バ海^ウ峯^ツの^ツ家^キと^キ成^ナり^ナと^ナ。教^コの^コ

狸

巻

從よなき業れ。時なき時來りける。
おや。ひまなく。に。おまの。身と。成でい。
愛子何れとも知らぬ男の。某が
酒を買飲ゆが。盃の。救ひ。續れども。
酒交さらしに。愛らるる。程ふ。い。成
者ぞと名を尋ねてゆへ。海中に

すむ。釋と。名。系。も。つ。成。失。て。い。
々。も。又。得。陽。の。江。か。の。釋。を
待。を。や。と。存。上。得。陽。の。江。に。道。に。て
一。葉。を。湛。さ。く。お。も。す。が。ら。
月。の。前。に。も。友。待。や。海。と。續。あ。く。る
盃。を。氣。を。湛。へ。て。待。居。たり。

釋を

を

声沙渡る浦風の 日 秋の調子や

あきららん 中舞三段 上 有冠や 身は質直

なるにやうけ 玉小塚を 湛へ唯今

日 任舞 ぬ カケ切 くるた ツキ とも

きもつ ヨロヅ ヨマデ 菊代述乃竹の葉は酒

汲 ツキ ども カシ すす カシ 飲 カシ ども カシ 爰らぬ秋の

夜は サカヅキ 盃 カケ 影も カケ 傾 カケ ぐ カケ 入 カケ 江 カケ は カケ 枯 カケ ら

何 カシ も カシ 心 カシ ならず カシ と カシ 醉 カシ ふ カシ 野 カシ 音 カシ

枕 カシ の カシ 爰 カシ け カシ 学 カシ ん カシ ら カシ ら カシ 思 カシ 入 カシ た カシ 泉 カシ は カシ 生 カシ 徒 カシ

晝 カシ せ カシ の カシ 宿 カシ け カシ 我 カシ 身 カシ あ カシ へ カシ くれ カシ

乱ノ時ハ

あ カシ へ カシ 毛 カシ と カシ け カシ け カシ け カシ 酔 カシ も カシ せ カシ ぬ カシ べ カシ

凍 カシ 雲 カシ は カシ や カシ く カシ ぬ カシ ら カシ と カシ 思 カシ 入 カシ ば カシ 泉 カシ は カシ その カシ 傍 カシ ト カシ 唄 カシ フ

獨
々

四
不

昭和四年六月五日印刷
昭和四年六月十日發行

潛作權所
復製不許



訂正者

廿三世
金剛右



發行兼
印刷者

檜常之助

發行所

東京市神田區錦町一丁目拾番地
合資會社
檜書



京都市二條通麩屋町東北角

檜書店京都出張所

終

